

「走れメロス」の語りに着目した読みの交流

松本 修

0 はじめに

本稿の目的は、『文学の読みとその交流のナラトロジー』¹⁾において提出した〈読みの交流〉活動を中心とした話し合い学習というものの具体的様相を描き出そうというところにある。「走れメロス」の〈語り〉に着目した学習課題に基づく学習過程の中から、あるグループの話し合いプロトコルをとりあげ、質的三層分析²⁾とメタ認知的レベルでの言及の分析とによって、読みの交流がどのように達成されているかについて検討する。

ここで扱うグループの話し合いデータは、『文学の読みとその交流のナラトロジー』においても一部用いているものであるが、あまりにも典型的に読みの交流を達成しているように見えるせいで、これまで論文化をためらってきたという経緯を持っている。ここでは、学習のデザインから分析までを一つのまとまりを持った形で述べていくために、前著や既発表論文と重複した記述を含まざるを得ないが、逆に言えば本論は一連の研究のエッセンスをまとめたものとも言える。

1 学習のデザイン

松本(2006)に述べたように、「走れメロス」は、いわゆる描出表現およびそれに近い表現を多く含んでおり、ナラトロジーの観点から興味深いテキストである。こうしたテキストの場合、作中人物に寄り添う読み手と語り手に寄り添う読み手との間に解釈の違いが生まれやすく、しかもその根拠が〈語り〉に関連づけて説明しやすい。〈語り〉を手がかりに読みの交流を中核においた学習をデザインしやすい学習材である。

調査にあたっては、二カ所の描出表現に着目し、解釈上の課題とするとともに、話し合いのテーマとした。この調査の授業は、「走れメロス」(学校図書『中学校国語2』平成12年度版)を学習材として、2002年2月22日から3月2日にかけて5時間扱いで上越教育大学附属中学校2年生を対象として行われた。4人グループによる話し合いのデータは、カセットテープによる録音データをトランスクリプトしたものである。

学習は、A「走れ! メロス。」という中盤の部分テキストと、B「塔楼は、夕日を受けてきらきら光っている。」という終盤の部分テキストについて、それぞれ「誰の声が聞こえるか」という学習課題に答え、それをめぐって話し合いが行われている。

指導過程は次のようなものであった。

第1次 テキストとの出会い。読みの形成への手がかりをつかむ。

第1時・授業者による朗読 学習者は目で本文を追う。

・「この物語を私はこう読んだ」という題で文章を書く。

主題よりは自由な構えで、物語の全体的な感想を引き出す。

・「何でもいから気づいたこと」を書く。

ここでは、疑問点や気づいた点、気になる点などを自由に書かせる。本文の箇所

を明示させて書かせる。

表現への着目、内容への着目など、それぞれの着目に応じて様々なことがらが指摘されると思うので、それらを回収後分類整理する。

第2時・気づいたことのうち、語りに関する要素について整理したプリントを配布、指摘されたことがらを概観する。語りの基本構造の確認。

- ・描出表現を指摘したプリントを配布、その知覚の基点を記入させる。
なぜそう言えるかという根拠を、テキストの該当の部分、別の部分から抜き出させ、それがなぜ根拠となるかを説明させる。

第2次 描出表現の部分に関する読みを交流する。

第3時・グループを作り、グループ内で互いの考えを発表する。

- ・他者の考え方について、感じたこと、疑問などを提示し、話し合いを行う。
- ・個人で、初発の感想と描出表現についての読み方との関連性を考える。

第4時・グループを作り、グループ内で初発の感想を発表する。描出表現の読みが初発の感想との関連において、どう考えられるか、意見を交換する。

- ・討議をふまえ、自分に欠けていた視点などについてまとめさせる。

第3次 主題を検討し、自分なりの解釈をまとめる。

第5時・「私は「走れメロス」をこう読んだ」という題で再び文章をまとめる。

可能な限り、根拠となる表現とその解釈、影響を受けた他の学習者の意見などに言及させる。

学習に用いた学習シートは以下のようなものである。

学習シート① B4 縦書き横置き

1 この物語を私はこう読んだ。

2 気づいたこと

「話し合い」マニュアル

- ・最初の発表者は西南の人、以下右回り。最初の発表者が司会をする。(まず録音機をスタートさせる。)
- ・学習シートの記述をもとに、わかりやすく自分の考えを説明する。
- ・聞いている人は、その発表者の考えを聞きながら、疑問や感想などをポストイットに書き込んでおく。ポストイットの一番上には「石川→井上君」というように、誰の誰への意見かわかるようにしておく。
- ・発表が終わったら、聞いていた人は右隣から順に、ポストイットの記述をもとに疑問や感想などを述べる。発表者は順に答えられる範囲で答えていく。質問などが終わったら、その人はポストイットを発表者の学習シートに貼る。
- ・全体の発表が一巡したら、問題になったところや、意見が食い違ったところなどについて、さらに意見を交換する。

学習シート② B 4 縦書き横置き

- ・はじまりの三文は、ふつうならもうちょっと後にくるべき文だと思った。最初に「メロスは激怒した。」と書いてあってもなんで？となる。だけど、それがきつとねらいだと思う。(K)
- ・同じセリフを二回繰り返して書いてあることが二度三度あった。ああすると強調できる。一行に短い文がいくつも入っている。だからけっこう読みやすい。(O)
- ・考えていることや心の中で思っている様子が多い。(F)
- ・状況などの説明が、読み手にかたりかけているような書き方をしている。(I)
- ・誰の考え(言葉)が分からない文がある。私はそれを、メロスの心の中(考えていることではない)だと思うのですが、ただのとがきかもしれません。(Y)
- ・人物の気持ちには「」がつかない。(T)
- ・メロスが心の中で思っていることが、えんえんと続きっぱなしのページがある。(128~131)(N)
- ・メロスが心の中で自分を言いかせているところが多い。(K)
- ・セリフではない所もセリフのように気持ちが入っている所があった。(例 p131 の一行)(IT)

2 「語り」の基本構造 冒頭部

メロスは激怒した。必ず、かの邪知暴虐の王を除かなければならぬと決意した。メロスには政治が分からぬ。メロスは、村の牧人である。笛を吹き、羊と遊んで暮らしてきた。けれども邪悪に対しては、人一倍に敏感であった。今日未明メロスは村を出発し、野を越え山越え、十里離れたこのシラクスの市にやって来た。メロスには父も、母もない。女房もない。十六の、内気な妹と二人暮らした。この妹は、村のあるりちぎな一牧人を、近々、花婿として迎えることになっていた。結婚式も間近なのである。メロスは、それ故、花嫁の衣装やら祝宴のごちそうやらを買いに、はるばる市にやって来たのだ。まず、その品々を買い集め、それから都の大路をぶらぶら歩いた。メロスには竹馬の友があった。セリムンティウスである。今はこのシラクスの市で、石工をしている。その友を、これから訪ねてみるつもりなのだ。久しく会わなかったのだから、訪ねていくのが楽しみである。歩いているうちにメロスは、町の様子をあやしく思った。ひっそりしている。もう既に日も落ちて、町の暗いのは当たり前だが、けれども、なんだか、夜のせいばかりではなく、市全体が、やけに寂しい。のんきなメロスも、だんだん不安になってきた。道で会った若い衆を捕まえて、何かあったのか、二年前にこの市に来た時は、夜でも皆が歌を歌って、町はにぎやかであったはずだが、と質問した。若い衆は、首を振って答えなかった。しばらく歩いて老爺に会い、今度はもっと、語勢を強くして質問した。老爺は答えなかった。メロスは両手で老爺の体を揺すぶって質問を重ねた。老爺は、刃りをはばかりの低声で、わずか答えた。

語り手

作中人物

知覚・感覚

声

説明・描写

学習シート③ B 4 縦書き横置き

1 誰の声が聞こえるか。

A p 131・1 走れ! メロス。

B p 132・3 塔楼は、夕陽を受けてきらきら光っている。

誰の声か	根拠となる表現 (ページ・行を明示)	根拠の説明
A B		
2 疑問・感じたこと (他の人から) (ポストイットを貼る)		

学習シート④ B4 縦書き横置き

1	他の人の意見に対して考えたこと。	
	から	
	から	
	から	
2	「この物語を私はこう読んだ」との関連	
3	疑問・感じたこと (他の人から)	

学習シート⑤ B4 縦書き横置き

「走れメロス」を私はこう読んだ	
	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の読みを支えている本文中の表現をきちんと引用して説明すること。 ・自分の読みに影響した他の人の意見を具体的にあげて自分が考えた過程をきちんと説明すること。

このように、学習過程は、描出表現を具体的にとりあげ、その部分テキストをめぐる解釈とその根拠、作品全体の読みとその根拠をめぐって、互いの考えを交流し、その違いについて自由に検討するという形でデザインされている。こうした語りに着目した学習課題によって、どのような読みの交流が行われるか、話し合いの成立と読みの交流の成立という二つの観点から検討する。

2 話し合いの成立

ここでは、質的三層分析によって、話し合いが充実したものとして成立しているかどうかを検討する。質的三層分析とは次のようなものである。³⁾

状況の文脈 (situational-context, situation) を導入せずに、その本来の文脈 (textual-context, co-text) の範囲内で、形式的な特徴・会話上の機能・意味的な内容の三つの側面に着目して、発話プロトコルをそれぞれの角度から分析し、それらの相互の整合性を検討することで、話し合いの間主観性を保った分析・解釈を行う方法。

三つの側面は一つの発話に重なった形で現れることも多いが、それを手続き上分けて分析し、三つの側面が矛盾をきたさなければ、充実した話し合いが行われていると判断するわけである。したがって学習においては、評価の方法としても用いることができる。

なお、ここで言う「状況の文脈」は、学習課題にあるような、学習者の解釈において駆動される状況の文脈ではなく、話し合いそのものの状況の文脈、とりわけ学習者や授業者にかかわる人間関係や学習集団の特性、授業の周辺的な状況などをさしている。「本来の文脈」は話し合いそのものをさしている。分析には、プロソディー (超分節的な音声的要素、声の表情) などの付随的要素も必要な情報であり、したがって、プロトコル作成にあたっては、そのような要素の反映できる書式を用いる必要がある。ここで用いている書式は次のようなものである。

記述の方法

- ・発話の単位は、間と内容 (提題表現+叙述表現) によって認定する。内容的に一連の発話は連続して記述する。
- ・発話には発話番号を付す。
- ・発話者をアルファベットで示す。
- ・漢字・平仮名・片仮名交じりで表記する。

記号

- ／／ 発話の重なり。直後の／／の後の発話が重なっている。
- = 途切れのない発話のつながり。直後の＝の後の発話がつながっている。
- () 聞き取り不能。中に記述のある場合は、聞き取りが不完全で確定できない内容。
- (3) 3秒の沈黙。
- (.) 「、」で表記できないごく短い沈黙。
- : : 直前の音がのびている。
- 直前の音が不完全なまま途切れている。
- 、 発話中の短い間。プロソディー上の何らかの区切りの表示を伴う。
- ? 語尾の上昇。
- 。 陳述の区切り。語尾の下降などのプロソディー上の区切りの表示を伴う。
- _____ 下線部の音の強調 (音の大きさ)。
- ° ° 間の音が小さい。
- (()) 注記

以上の記述方法は以下を参照して定めた。

- P・ザトラウスキー 『日本語の談話の構造分析』 くろしお出版 1993
- 西阪 仰 『相互行為分析という視点』 金子書房 1997
- 好井裕明・山田富秋・西坂 仰 『会話分析への招待』 世界思想社 1999
- 野村真木夫 『日本語のテキスト—関係・効果・様相』 ひつじ書房 2000

この書式に従って、第3時・第4時における2度の話し合いを録音したテープからトランスクリプトし、プロトコルを作成した。なお、このグループ全員はそろわなかったが、単元終了後にインタビューを実施し、それもトランスクリプトし、プロトコルを作成した。メンバーは以下のようにになっている。

男子1：AH、女子1：TK、男子2：FT、男子3：YS（授業者：MO）

2. 1 形式的な特徴

第1の話し合いは、2カ所の描出表現（「走れ！ メロス。」「塔楼は、夕陽を受けてきらきら光っている。」）について、個々人が考えた知覚の基点（誰の声か）を書き込んだ学習シートに基づいて、根拠も含めてそれぞれの考えを述べ、他者の考え方について、感じたこと、疑問、などを提示し、やりとりを行ったものである。

この話し合いでは、当然のこととして、4人のグループのメンバーが交代に各自の考えを発表することから始まるので、司会の指示により交代で述べる組織立っていてフォーマルな形になりやすい。実際そのように進行している。冒頭は次のようになっている。

1 AH はい、え：：、じゃあ。

2 FT YSくんから。

3 AH はいじゃあ ぼく休んでいたの、はい、はい、司会だけということになってしまうんですけど。はい、じゃあ右隣というと、はい。便宜的にFT君の方を向くとやっくんが右隣なので、YS君、どうぞ。

4 YS え：：と、Aの部分ですが、走れメロスというのは、えーおそらくメロスの……（略：以下同じ）

発話の交代はAHの司会とメンバーの自主的な判断でしかしスムーズに行われていて、フォーマルな形である。しかし、その中でも、連続発話や同時発話も現れている。次のような部分である。

7 YS ……多分それはメロスの中の神ゼウスの声だからじゃないんでしょうか＝

8 TK ＝ですね。もし、自分で言ったらおかしいですね。

9 YS ですね、「やっばおれって勇者じゃん」みた／／いな（（笑い）変ですね。

10 TK ／／（（笑い）勇者じゃ変。

11 FT 自覚症状ありありだね（（笑い）

YSが最初の発表の前半部分を終えたところで、TKが連続発話で自発的に発話を行っており、それにYSが応じている。TKもYSの発話に介入する同時発話でYSの発話と同調している。なお、ここには、笑いが現れており、早い段階からフォーマルな中に、くだけた闊達な話し合いの特徴が現れている。

3人の発表が終わると互いの発表に対するコメントをポストイットに書いて互いの学習シートに貼り付けるという作業を行っているが、その間にも自由に会話を行っている。次のような形である。

58 FT なにどっち？ A、Bどっち？ どっちも？ Aはメロスの心の中の声で。Bは、本当にメロスが感じた、感じたというかメロスが本当に思ったこと。

59 TK うんうん。

60 FT 自分で、自分自身で考えたこと。

61 TK 同感だ同感だ。

62 YS きびしいなあ。

なお、ここでのやりとりを通して、十分な準備はないが、AHも発表するというところに

なり、発表している。この発表はシートの記載に基づいていないため、口調もくだけており、間に他のメンバーの発話が挟まれる形で進行している。次のようになっている。

81 AH ちょっとまってよ、え：：とね、ど：：なってんだこれは。ま、とりあえずメロスはね、Aは絶対メロスで、えっとその理由は、……多分、まあ、負けず嫌いなメロスですから、はい、えーとこういうところで自分を活気づけてあの：：見失わないように頑張って、やろうかなと// うん、そういうがんばりとか？ が？ ん？ はい、

82 TK // そうなんだ

83 AH いろいろ、励ましてる中で走れメロスっていうのは、あの、ほらよくあるじゃないです//か、自分のこと、自分のことAH君とか言う人。

84 TK //ねえ、あるよね。いやあそれは＝

85 AH ＝そうAHはねえとかそういう//そう、いう。

86 TK //それはいいけど、自分のさ、名前でこう//いうのが。

87 AH //で、自分、走れわたしでもいいんですけど、走れわたしだと……

AHとTKとの介入による同時発話の連続という形で発表が進行している。この発表を受けてのやりとりでは、同時発話が多くなり、口調もくだけ、笑いもあって、自然なやりとりがなされている。次のような形である。

112 YS TKさんのところでも書いたんですが、一人称を自分で呼びますかね＝

113 AH ＝呼び//ます。

114 TK //呼びます。それは私も言おうとしたんです。

115 YS 呼びますか？

116 TK 呼びます。

117 AH 例えばかおりは：：とか言うでしょ。// ()

118 TK //違う、(笑い) そうじゃなくて、じ、一人称励ましたりするときとか？

このように、フォーマルな形にのっとりつつ、自然なやりとりが闊達になされているものと見られる。

第2の話し合いは、最初の読みの段階で課題として書かせた「この物語を私はこう読んだ」と第1の話し合いにかかわる描出表現の読みとの関連という課題について書いたメモをもとに行ったものである。しかし、この課題の意味が十分に伝わっていなかったため、話し合いのテーマそのものを「この物語を私はこう読んだ」に限定したような形で進行させている。

最初からくだけた自由な形で発話が行われ、メモをもとにした発表でも、読み上げるような形にはなっていない。次のようなやりとりとなっている。

16 AH そうだね。よし、俺からかい？

17 FT そうそう。

18 AH こう読んだ？ はいはい。え：：とですね、最初の方どう読ん、ん？ 最初の方？ はですね。はい。とりあえず訳が分からない文章だったので、個人的な、はい、え：：と、メロスとセリヌンティウスと、ディオニスだっけ？

19 TK そう。

20 YS 確かディニオス。

21 AH ディニオス？ そうそうそう。

22 TK ふふ。

23 AH そう、その3人について、あの、現代人だったらどういうことかなっていうふうに自分で考えてみたんですよ。で、個人的に、えーと最初は、あの、メロスとセリヌンティウスが、えーと友達思いなんだけど、実は片方の友達としか、あの、友達になれず？ もし他の

人と友達になるんだったら、すごくだまされやすいタイプかなというふうに解釈をしました＝

24 TK =んふふ

25 YS じゃあ超正直者と人見知り？

26 AH そう、超正直者と人見知り。で、え：：と、そのうちメロスの方は、えっと自分勝手な一面もあるし、え：：と、なにげにいろいろ心理状況をいろいろ解説するので、多分本好きな人かなーと思いました。

「え：：とですね」というような発話や上昇イントネーション「？」が現れ、メンバーも自在に発話をしている。冒頭近くなので同時発話は少ないが、連続発話も見られ、最初方自由なやりとりになっている。以下このような傾向で話し合いは進んでおり、基本的に第1の話し合いの形式的特徴をより自由にしたような形となっている。

以上、このグループの話し合いは一応司会を中心としたフォーマルな形を保ちながらも、さまざまな形式上の特徴に自在で闊達なやりとりの特性が表れており、それは第1の話し合いでは後半に向けてより強調された形で表れている。FTの発話が比較的少ないが極端な偏りとは言えず、形式的には活発でかつ自在な話し合いになっているものと考えられる。

2. 2 会話上の機能

第1の話し合いの冒頭は次のようになっている。

1 AH はい、え：：、じゃあ。

2 FT YSくんから。

3 AH はいじゃあ ぼく休んでいたの、はい、はい、司会だけということになってしまうんですけど。はい、じゃあ右隣というと、はい。便宜的にFT君の方を向くとやっくんが右隣なので、YS君、どうぞ。

4 YS え：：と、Aの部分ですが、走れメロスというのは、えーおそらくメロスの……

AHが司会であるが、第1の話し合いにおいては、前の時間に欠席していたので、内容的には十分な準備がないまま、司会担当をする事情を説明している。2FTは、AHの事情に配慮し、YSから発表を始めた方がよいというアドバイスをしたものであろう。3ASはそれを受けて、再確認しながらYSの発言を促している。司会を中心とした話し合いを推進する上での機能を担った発話がなされている。

形式的な特徴で見たように、話者の交代などは自在にスムーズに進められているが、意図的に話し合いを円滑にすすめる機能を担った発話も見られる。次の発話は、「すばらしいですね」という評価をメンバーの一人が行い、ついで司会が「拍手」という形でそれをメンバーに広げている。以後、発表を終えるとみんなで拍手をするという形が、第2の話し合いまで続けられている。

13 TK 長かったですね。すばらしいですね ()

14 AH とりあえず拍手。

((全員で拍手))

話し合いの手続きをめぐってのやりとりも次のようになされている。

16 YS あれじゃねえか、右から、右端、右隣から順番にポストイットで記述をもとに質問を(3)()

17 AH 発表が終わったらじゃなかったっけ。

18 YS 全員？

19 AH 多分。

20 YS 失礼しました。

上の例は順序をめぐるものだが、話し合いの中でのやりとりのあり方をめぐっての発話もある。次のような例である。

- 99 YS あそう。じゃ、じゃ質問を受け合おうよ。
100 TK はい。あ、あ、あ。質／／問したかったんだけど。
101 YS ／／傷をなめ合うというか、はいどうぞ。
102 TK はい。
103 YS し、司会者。
104 AH はい、じゃあYS君について、はい、YS君／／について。

YSがポストイットのやりとりが終わったことを受けて、99で「質問を受け合おう」という提案をする。TKがそれを受けて100で質問をしようとする。101YSの介入による同時発話は99の補足であると考えられる。101YSの「はいどうぞ。」は司会のAHに向けての発話であったが、TKは102で発話をしようとして「はい。」と答えている。YSはTKを指名して発言させるのを司会のAHにさせようと103の発話を行っている。104はAHがそれを受けて話し合いを進行させている。このように、自然なやりとりの中で、司会を中心にしたフォーマルな形を意識して話し合いをメタレベルからモニターしていることがわかる。

第2の話し合いでも、このような話し合いを推進する機能を担った発話があり、メタレベルからモニターしながら、話し合いの進行をコントロールしていることが変わらず見て取れる。

- 122 TK ……真の友情というものを確かめられてよかったです。はい。
(拍手)
123 AH 何かうるさすぎ。
124 FT 俺はずいんだけどー
125 AH はいえーとね、はい、ちょっと今のはちょっとうるさかったよ。だって今、今、ほとんど班、なおきの班、見てー
126 FT もう、やる気だそう。
127 TK いや、最後だから説得力あるようにやってね。
128 YS 注目ー

第1の話し合いから維持されている「発表が終わると拍手でねぎらう」というシステムについて123「何かうるさすぎ」124「はずいんだけど」という言及がなされている。これを司会が「ちょっと今のはちょっとうるさかったよ。」と確認している。126FTは、これをやや転換させて次の発表がFTであることを踏まえ、「やる気だそう」という形で本来の話し合いに引き戻している。127TK、128YSはこれを受けて次の発表を促す発話になっている。

このように、会話上の機能の側面から見て、話し合いを有効に推進するための発話がなされており、全体としてバランスのとれた話し合いになっているものと考えられる。

2.3 意味的な内容

ここでは、第1の話し合いおよび第2の話し合いから、話し合いが意味的な内容を伴ったものとなっているかどうかを、それぞれ一カ所のやりとりを見ることで確認する。

第1の話し合いでは、次のような部分がある。

- 146 YS じゃ、じゃ、メロス、走れメロスというのは、泉の水を見て、希望からきた言葉だったのか、メロスが前向きな人間で、そういう人間性からきた言葉なのかっていう。メロ

スが前向きだから、走れメロスで、メロスと自分に言いかけて、自分を活気づけたのか、泉からの水を、流れてきて、で、その水にこう、希望をちょっと持てて、その希望から走れメロスと自分を励ましたのかっていうー

147 TK ふふ、／／私の質問ではないのでー。

148 AH ／／うーん、ちょっと、ちょっとタンマ。え：：とですね、それはね、え：：と、(6)え：：とあの、前の？(1)ところで、(2)あの：：、前のところで、あの：：、えーと、あの、自分をけなしてるところありますね？

149 TK うん。

150 AH はい、自分を、え？

151 YS はい、はい、はい、はい。

152 AH ありますね。自分をあの一／／なんて言うか、私はバカですがっていう、そういうところがありますね。まあ、そういうところから、あつて、こういう気持ちは、あの、生まれたってことは、多分希望の方が強いんじゃないかなと思います。あの、ま、確かにあの一、希望から生：：ま：：れたのもあるし、もしかしたら、あの、水を飲んで自分の人間を？あの、自分を見うしな、見失った自分を、もう一回自分で見つめ直した？ ていう：：ことから人間性ともとれるので、多分これは両方兼ねているかなと思います。はい。

153 TK ふふふふふ。

154 YS じゃ、そこで言ってた希望って、自分を取り戻したと。

155 AH そう。

156 YS 自分の希望だ。

146 YSはAHに対して、81 AHにあった「Aは絶対メロスで、えっとその理由は、(中略)あの130ページの？ 8行目で、「その泉にすい込まれるようにメロスは身をかがめた」とか、で、そっからずっと追ってくと、あの、メロスがああ名誉を守るき、わずかながら希望が生まれたということで、メロスに希望が生まれたことがわかりますね？ えーと、それでその希望から、えーと後ろの方で僕は、あのその希望から、生まれたことから、自分を励ましている言葉だな、というふうに、あの、(中略)これは現実的にあの、えーと、1回、多分、まあ、負けず嫌いなメロスですから、はい、えーとこういうところで自分を活気づけてあの：：見失わないように頑張つて、やろうかなと／／うん、そういうがんばりとか？ が？ ん？ はい、」という発言を受けて、「メロスが立ち直ったのは、泉の水のおかげなのか、それともメロス自身の人間性からきたものなのか」という質問をしている。AHの発言自体が二つの意味合いを持っていることを理解し、その上で、どちらかという質問をしているわけである。AHは前時に欠席しており、準備不足もあつて曖昧な発言になったものと思われるが、AHは148で「うーん、ちょっと、ちょっとタンマ。え：：とですね、それはね、」と考えながら反応している。それを、149 TKや151 YSが相づちによって助け、発言を促している。その中で、152 AHが説明を行い、「多分これは両方兼ねているのかなと思います。はい。」とまとめると、TKは153の笑いで説明をなし逃げたことを評価し、YSは154で内容を確認し、156で「自分の希望だ。」という強調された発話でまとめ、確認・評価している。ここでは、準備不足であったAHの発言を確認し促しながら話し合いが行われ、それがAHの話の内容をきちんと聞き取り理解したことで行われていることが見て取れる。

第2の話し合いには、次のような部分がある。

276 AH 何でゼウスにこだわるんですか？

277 TK はい？

278 YS あ、なるほどね。あ、別に、あの何だ、前回の時間F君からその、心のなんだ、

メロスの心のかっこメロスとは別の声って書いてあって、すごい、あの、あっそうか、別にゼウスじゃなくてもいいんだなと思ったんですが、何か、ゼウスの方が何かと都合がいいのかなと、メロスの中の別のメロスっていうふうに考えちゃうと、結局メロスだから、な、何かこう、自分と他人じゃないと客観的にみれないっていうか、自分のことを外から見てくれないんですよ。走れメロスというのも自分の中の自分が言うわけじゃなくて、自分の中のメロス、あ、ゼウスがあくまで自分に言うわけであって、やっぱり第三者が必要なんだろうなと。

279 TK じゃ、メロスがさ、今まで、こう勇者とか言われてるのはゼウスのお陰なの？

280 YS いや、自分のメロスの中のゼウスが、ゼウスが自分に、お前は勇者だって言ってる。

281 TK あ。

282 FT だからその力でメロスが本当の力を出してたんじゃないの。

283 TK ふふ。

284 FT 後押し。

285 YS メロス自身が俺って勇者じゃんって言ってるんじゃないで、自分が、いやゼウスは俺のこと勇者だと思っててくれてるよ、絶対みたいな。

286 TK ああ、でも／／みんなからもけっこう勇者勇者言われて。

YSは、学習課題となっていたA「走れ！ メロス。」という表現についてゼウスの声とする考えを提出していた。また、この第2時の話し合いでも、77YS「ちょっと考えたのが、もしかしたら、その③プリントのBのところ？ も、もしかしたらゼウスじゃないかなーと／／っていうか。ゼウスの考えたことが、すべてー」79YS「違うな、メロスが考えたことが、全部ゼウスがこう代弁して、ここに書いてくれてるだったら、何かいろいろと説明がつくんじゃないかなあと、そのメロスが見えてるんだけど、メロスの中のゼウスだから、ゼウスにも見えてるんだと／／言うようなことも、考えてみたりとか。」とする見解を出していて、他のメンバーとは異なる解釈を提示している。79YSの発話に対しては他のメンバーすべてから「すばらしい」とする賞賛（やや揶揄的な印象もあるが）の言葉が返されているが、この違いについて、AHが276で「何でゼウスにこだわるんですか？」と尋ねているわけである。F君の発言に言及しながら、YSは、別の解釈との比較を行いながら、自分の解釈を人の心理という「常識」に訴えながら展開している。279TKは、別の角度から、メロスの勇気というものを評価しないのかというような立場で反論を試みているし、282FTはYSの立場に立って解説し「後押し」している（284の発話はFT自身の発話の機能をメタレベルから解説したものと言えよう）。ここには、互いが互いの解釈をある程度理解しつつ、疑問点を明らかにするという内容を保った話し合いが見られる。

以上二つの部分について検討したように、このグループの話し合いにおいては、意味的な内容についても話し合いが有効に展開しているものと見ることができる。

2.4 三層のかかわり

以上、形式的な特徴・会話上の機能・意味的な内容の三つの側面に着目して、発話プロトコルをそれぞれの角度から分析した。形式的な特徴においては、フォーマルな話し合いの形式を守りながらも、自由で闊達な話し合いが展開されていることがわかり、会話上の機能から見ても、話し合いをメタレベルからモニターしながら話し合いを有効に推進しようとしていることがわかった。また、意味的な内容から見ても、互いの解釈の内容やそれぞれの解釈の違いを踏まえた話し合いが展開されている。この三層からの分析結果により、

形式的にも機能的にも意味的にも活発で内容のある話し合いが展開されたと捉えることができよう。ただ、意味的な内容については、この学習が「読みの交流の成立」を目標とするものであることから、以下、改めてその観点からその成否を検討する。

3 読みの交流の成立

読みの交流をどのように捉え、どのようにその成立の成否を見るかという点については、松本（2006）で述べたが、その概要をまとめると次のようになる。

読みの交流活動においては、個々の読み手の読みの形成においてリソースとして導入されるテキストの文脈 co-text と状況の文脈 situation がともにリソースとして駆動される。個々の読み手は、テキストのことは自分なりに関係づけ、意味づけるが、同時に、テキスト外の様々な要素、たとえば、「これは俳句だからこう読むべきだ」というようなジャンル意識や「色彩語が目立つから集めてみよう」というような技術などの読みの方略、「羊飼いというのは素朴な暮らしをしている人だ」というような知識や「かもめというのは矢印に似ている」というようなイメージなどの背景的な既存の情報など、個々の読者が持っている経験・知識・認知的特性などを呼び出し、利用している。読みの交流においても、そうしたテキストの文脈と状況の文脈をともに導入し、それぞれの読みを説明したり、他者の読みを理解したりしようとする。

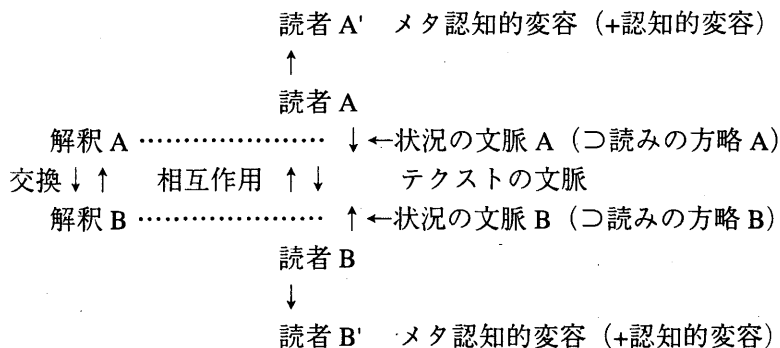
テキストの文脈は共通の対象として一応認めることができる。しかし、それへの働きかけ方（読みの方略）は読者によって異なる。読みの方略自体も状況の文脈の一つとして働く。状況の文脈は読者によって異なる。個別の経験・知識・認知的特性などが作用する。

読みの交流は、行為としては社会的相互行為・相互作用であり、内容としては読み（解釈）の交換である。

読みの交流は読みの変容をもたらす。その変容には解釈の変化としての認知的変容と、読みの方略の変化としてのメタ認知的変容がある。⁴ 読みの変容でより重要なのはメタ認知的変容である。メタ認知的変容を伴わない認知的変容、読みの乗り換え⁵ は合理的にはあり得ない。認知的変容を一見伴わないメタ認知的変容は読みの再確認のような形であり得る。

このような読みの交流に働く様々な要素を図式的に整理すると次のようになる。

図 読みの交流の理論的モデル



文学教材の読みの学習において、学習者同士がそれぞれの解釈や感想を述べ合うという形の話し合いの活動が行われるようになっており、このような活動を「読みの交流」と呼

ぶことが一般化している。しかし、単元における「話し合い」の位置づけや、話し合いの話題によって、その活動における相互作用の実質は大きく異なっているのが現実である。

学習者相互の読みを互いに提示しあう活動を、〈読みの交流〉と呼び、そこに高い教育的意義を認める議論は、1980年代以降の読者論の影響などを背景として、現在では主流になっている。また、そうした学習活動を通じて個々の読者に〈読みの変容〉がもたらされると考え、その変容を学習の成果と見る考え方も支配的である。

しかし、これまでの議論では、読みの交流がどのような要件を満たせば成立したと言えるのか、検討を欠いたまま、個々の解釈の提示をただ交流とみなしてきたきらいがある。また、メタ認知的変容を見るために、必要条件ではない認知的変容を見ようとしてきたという矛盾があった。つまり、解釈が変わったということを根拠に読みの交流を認定していた。これでは、単なる解釈の乗り換えが読みの交流と認定されてしまい、読みの深まりのないままでも学習の効果が認められることになる。衝突のない多様性の容認や、衝突のない読みの乗り換えが、自分の読みを見直す読み直しを含む交流と同一視されてしまう。行為としての相互行為があればよいとみなす安易な状況論的学習観も同じ問題を抱えている。いわば、メタ認知的なレベルと相互行為のまさに行為としてのレベルが関連するはずなのに、もっぱら認知的なレベルと相互行為が直接に関連づけられて語られた側面があり、さらに単純な場合には相互行為のレベルだけで学習の意味が語られてきた側面がある。自分自身や他の学習者の読みについて、それを比較したり相対化したりする言及や、読み方などメタ認知に関する言及があることによって、読みが変わらない場合でもメタ認知的変容を見取ることができ、読みの深まりを確認することができる。

以下、この枠組みにより、特に第1の話し合いにおいて、交流が成立したかどうかを検討することにする。

まず、個々の解釈は、学習課題および学習シートによって、テキスト中の二カ所の描出表現が「誰の声か」を、テキストの他の箇所と関連づけて根拠づけて述べるものとされており、テキストの文脈をリソースとした解釈として提示されるよう枠づけられている。ただし、根拠の説明の中には、個々の読み手の状況の文脈が導入される。たとえば、YSの解釈および根拠の説明は以下のようにになっている。テキストの文脈に下線、状況の文脈に二重下線を付す。

4 YS え：と、Aの部分ですが、走れメロスというのは、えーおそらくメロスの中にいるゼウスの声だろうと。っとなにゆえゼウスかと申しますと、(2) その130ページの14行目ら辺から「私は信じられている」とか「私の命なぞは関係ない」とか「私は信頼に報いなければならぬ」というような、「私は」「私は」「私は」というふうに続いていて、あの、「走れメロス」と自分のことを、あの、メロス自身が三人称で言うのもおかしかろうと、で、もう「走れメロス」というのは、こうメロス自身が自分に言い聞かせている声だろうから、メロスの声なんだけどメロスじゃないと。じゃー体これは誰なのかと考えたときに、おそらくメロスが自分の中につくっている神ゼウスのことなんだろうと。で、メロスではなくゼウスのことを話の話題に出していますが、自分の中にいるメロスが、自分に対して「お前は真の勇者なんだ」とか「メロスお前の恥じゃない」とかいうふうに自分にとって都合のいいことを言っているような神をつくり出しているとしたら、なんか納得がいくんじゃないかなあというふうに考えたので、「走れメロス」というのはメロスの中の神ゼウスの声なんじゃないかなあと考えました。

7 YS そんなところ、そういうふうにごうメロスの中のゼウスが、メロスに語りかけているところがけっこうたくさんあると思います。例えば131ページの4行目、「メロスおま」「メロスお前の恥ではない、やはりお前は真の勇者だ」って言うのは、何かあまりにもメロスにと

って都合がよすぎるなあっていうふうに思ったんですが、多分それはメロスの中の神ゼウスの声だからじゃないんでしょうか＝

12 YS Bの部分ですが、Bの部分、私はメロスだと考えました。で、あの、その「メロスは、今ほとんど全裸体であった、呼吸もできず、2度3度口から血が吹き出た」っていう132ページの1行目は語り手の文章だと思います。これはメロスがなんとかだった。とか、メロスはこんな様子でしたっていうふうに、こう、客観的に見たっていうか、ちょっと高い視点から見た感じで、メロスの状態を表しているので、これは語り手の文章だろうと。(.) だけど、そのすぐ下にくる「みえる」っていうのは、あの、他の誰か見たわけでもなく、メロスが見えたわけで、そこがもし語り手の文章だったらメロスは見えていた、とか、メロスは見ていました。みたいな過去形で、しかも上から見たっていうか、自分のことじゃないようなふうになってると思うんですよ。そうするとこれは、語り手の文章ではなくて、あの、一緒に走ってたセリメンティウスのおじさん((フィロストラトスの誤り))でもなくて、多分メロスのことであろうと、そうすると、その、見えるって、その塔楼が夕日を受けてキラキラ光ってるっていうのも多分メロスのことではないでしょうか。と考えました。以上です。

テキストの近傍の表現を引用しリソースとしつつ、「自分のことを三人称で言うのはおかしい」という個人的感覚、解釈の整合性、ナラトロジー的な観点からの三人称による描写についての判断、「タ系列」文末表現と現在形可能表現との相違についての判断が状況の文脈として導入され、駆動されて解釈を形成していることがわかる。

TK、FT、AHは「走れ! メロス。」については3人とも「メロス」としており、相違がある。TKはそのことを次のように述べている。

24 TK 負けそうな自分に、こう、一生懸命呼びかけて、いるものなんだと思います。えーと、なんだ、ま、メロスだけに、こういう走れメロスという話だけにかかわらず、えっと、いろんな本に今まで、えーとその上に、例えば自分を励ます時とかなんか、あの、がんばれ私：：だとか、えーとなんとかだとか、自分に呼びかけるようなことをよく、そういうシーンがよくあって、えーっと、あと、そうその130から131にかけて、えーと、んーと：：何だ？えーと、私は信じられているとか、えーと、私の命などは問題ではないとか、そう自分にこう：：思っていることを言っているので、この、走れメロスというのも自分に対して、一生懸命呼びかけて走ろうと、頑張っているんだと思います。

ここには、他のテキストにおける語りのパターンが状況の文脈として導入され、提示されている。

このような解釈と、解釈に駆動されているテキストの文脈および状況の文脈が話し合い活動の中で、互いに意識され、理解された上でメタ認知的変容が認められるかどうかの問題である。

上にあげたYSとTKの読みの違いの原因の一つとして、二人の状況の文脈の相違がある。このことが話し合いの中で表面化する。

112 YS TKさんのところでも書いたんですが、一人称を自分で呼びますかね＝

113 AH =呼び／／ます。

114 TK ／／呼びます。それは私も言おうとしたんです。

115 YS 呼びますか？

116 TK 呼びます。

117 AH 例えばかおりは：：とか言うでしょ。／／()

118 TK ／／違う、(笑い) そうじゃなくて、じ、一人称励ましたりするときとか？

119 YS 自分の名前を、まあ、自分はなんとかですとかって言うのはやるけど、(3) がんばれ俺とかあんまり言わないじゃないですか。

120 TK え、言うよ、言うよ(.) あ／／の：：

この状況の文脈の相違は経験と感覚によるものと思われる。112 YSの発話は直接的には87 AHの「自分、走れわたしでもいいんですけど、走れわたしだとなんと、何となく、普通自分の名前であるの、別人のように励まされているほうが、多分自分でも元気が出ると、多分考えたのでしょう。」という発話に向けられた質問である。しかし、AHと同様の読みを示していたTKがほぼ同時に反応していることが114の発話に見て取れる。AHは一人称では不自然だから「名前で別人のように」としているが、TKはYSの疑問に促されて「一人称でも名前でも言う」という主張をするに至っている。

125 TK //がんばれ、がんばれわたし。//いつも思ってたけど。

126 FT //うっわー

127 YS 私とか代名詞ならまだしも、自分の名前だぜ？

128 TK え？ //いや、いや

129 YS がんばれ安田、がんばれ安田。

130 FT それはね。

131 TK 何で、思うよね。

132 AH けっこう言いますよ。

133 TK がんばれかおり、がんばれかおりって、//強めたいときは自分の名前言うんじゃない？

134 YS なんかすごい不思議。

135 AH よくマンガ見ればわかるんだよ？

136 TK マンガ見れば。

137 AH 例えばなんだろうなあ。

138 TK ドラマを見たまえ。

この議論は平行線ではあるが、YSの導入した状況の文脈が他の3人と異なることが明確に表れており、その背景として、マンガやドラマのようなジャンルの語りの様式があることが明らかになっている。互いに解釈の違いに状況の文脈がかかわっていることがメタ認知的レベルで意識され、言及されている。ここには読みの交流が成立している。

YSは、第2の話し合いで、64 YS「で、それを、この、誰の声かというところを考えたときに、その、Aの走れメロスのところを、ゼウスの声だと言ったじゃないですか、これは、メロスが、心の中にゼウスを持っていて、そのゼウスが自分の悪いところを全部、いいように都合をつけて説明して、何というかごまかしてくれる役割を、メロスの中でして、メロスは自分の中のゼウスをつくって自分の悪いところをすべてゼウスに任せてしまって、自分の悪いところを見ないようにしている。」というように、人物論を展開する中で「メロスは自分の中のゼウスをつくって」としており、自分で自分を名前で呼んで励ますのは不自然だという主張とは異なる説明を行っている。YSは自説を変化させていないが、その説明の仕方を変え、他のメンバーに理解されようとしている。そして他のメンバーは既にみたように賞賛で応えている。YSは解釈の整合性を保つという状況の文脈も導入しており、他のメンバーとの解釈の相違とその背景にある状況の文脈の相違をふまえて、少なくとも状況の文脈への言及の仕方の変更を伴って解釈の修正を行っている。

このように、個々の解釈に導入されているテキストの文脈と状況の文脈が互いに理解され、そのことへのメタ認知的なレベルでの言及などがあって、個の読みが影響を受けていることが確認される。ここには明確な読みの交流が成立していると見ることができる。

学習シート、とりわけ最後の「「走れメロス」を私はこう読んだ」に明確な相互引用などが少なかったのは、読みの交流という学習に不慣れであったことが影響しているかもし

れないが、事後インタビューでは、FTが「登場人物、心の中を覗いたり、それでそこから話し合ったりして、うん、まあ、その点について面白かったんですね。あと、うーん、その、いろいろ、そ、するんですよ。」というような感想もあった。語りにかかわる学習課題を通して、読みの交流は一応達成されたと思われる。

4 おわりに

以上、語りにかかわる学習課題をめぐる話し合いのプロトコルを対象として、質的三層分析によって話し合いが有効であったこと、読みの交流の成立基準に照らして話し合いの中で読みの交流が成立する条件が満たされていたことを明らかにしてきた。読みの交流は、語りにかかわる課題によってのみ成立するわけではないし、学習者の発達段階や状況によっても左右される。ただし、どのような課題によるにせよ、読みの交流が成立するには、話し合いが話し合いとして意味あるものとして行われ、その中で、メタ認知的変容にかかわる読みの交流の成立条件が満たされなければならない。本論での検討は、読みの交流が成立したかどうかを検討するための一つのモデルとして提出するものである。

*注に掲げた文献以外の参考文献やこの授業の他のグループの話し合いに関する細かな解釈と文脈の関係、このグループの話し合いにおける状況の文脈に関する分析については、松本（2006）を参照されたい。

*本研究にかかる3つのプロトコルについて詳細に見たい場合は、次のアドレスにメールを送っていただければ、添付ファイルで提供する。 osamu@juen.ac.jp

注

- *1 松本修（2006）『文学の読みと交流のナラトロジー』東洋館
- *2 松本修（2004）「国語科教育研究における話し合いプロトコルの質的三層分析」『臨床教科教育学会誌』第3巻第1号 臨床教科教育学会 2004.6 pp.74-82
- *3 松本修（2004）前掲 p.77に基づいて要約
- *4 ここで言う認知・メタ認知は読みにかかわるものなので、通常より複雑な内容を含むものを認知に含めてある。メタ認知は、自らの読み方を意識するという意味で方略にかかわる。
- *5 他者の読みを簡単に取り入れ、自分の読みを放棄するような読みの転換を「乗り換え」とここでは呼んでいる。

（まつもと おさむ 上越教育大学大学院 准教授
学習臨床講座・教職大学院準備講座）